

土器埋納土坑 SK10050 の 屋内調査

—第491次

1 はじめに

第491次調査は国土交通省による平城宮跡展示館建設にともなう発掘調査であり、2012年4月2日から7月6日にかけておこなわれた（『紀要 2013』参照）。調査地は、平城京左京三条一坊一坪の南半部に該当する。

当調査区の西部（坪内西南部）、奈良時代の整地土上面（標高63.50m）で、内部に複数の土器を含む土坑SK10050を検出した（図256）。内部の土器の大部分を占める土師器は胎土が粘土状に変質し、非常に脆弱な状態であった。さらに、平面検出状況からは地鎮祭祀関連遺構である可能性も考えられ、銭貨類などの出土も予想された。そのため、土坑自体を周囲の整地土ごと切り取って搬送し、屋内にて遺物の取り上げなどの作業をおこなうこととした。今回は、この屋内調査について報告する。

2 土坑の切り取りと屋内調査

土坑SK10050の切り取りは、2012年6月18日から20日にかけて実施した。まず、土坑上面に露出している土器を水を含ませたキムワイプで覆って養生し、土坑掘方の周りに一定の余白を残しつつ周囲の整地土を掘削する。十分に掘り下げたところで土坑の上面および側面を周囲の整地土ごと硬質発泡ウレタンでコーティングし、切り離す。クレーンで吊り上げて土坑を取り出し、反転させて残る下面もウレタンで覆い、屋内作業場へと搬送する。土坑上面のウレタンを剥がし取り（この際、キムワイプを間にはさんでいることにより遺物を傷つけずにウレタンを除去できる）、さらに側面および下面の余分なウレタンを削り落とし、屋内において保管することとした。

その後の屋内調査では、まず平面実測をおこなった後、まとまりを崩さぬよう注意しながら土器群を取り上げつつ、土坑の東北部3分の1ほどを徐々に掘り下げ、底面に達したところで断面図を作成した。つづいて、土器群を取り上げながら残りの部分を掘削し、土坑を完掘した。土器は、まとまりごとにX線CTスキャンし、内部に他の遺物が含まれていないことを確認した後、洗浄作業をおこなった。また、土坑の埋土も水洗洗浄および

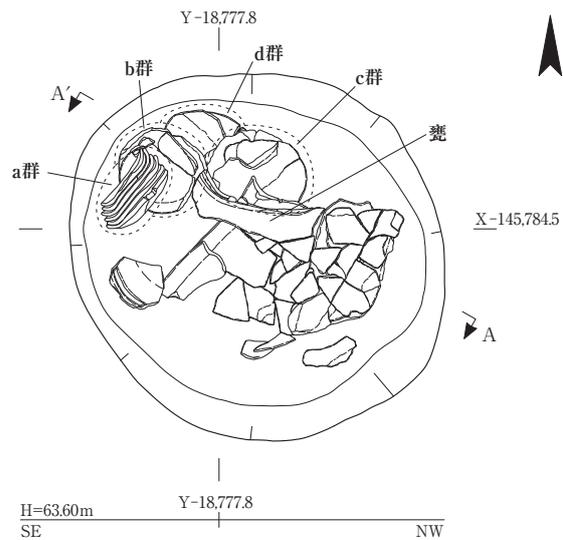


図256 SK10050遺構平面図・断面図 1 : 10

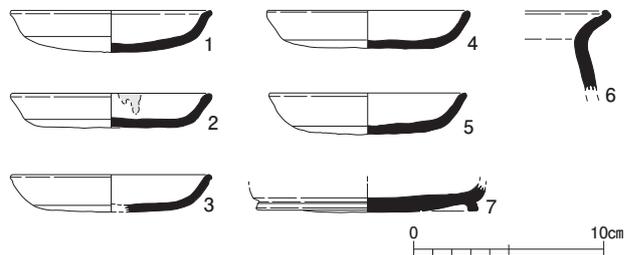


図257 SK10050出土土器 1 : 4

篩別し、微細遺物の抽出にも努めた。

最終的に、土坑SK10050からは土師器甕1点、土師器皿C13点、須恵器杯B片1点が出土した。また、土器以外の遺物はまったく出土しなかった。

3 調査所見

土器の埋納状況 土師器甕は横倒しの状態で検出した。甕の内部には土坑埋土である灰黄褐色砂質土と灰黄褐色粘質土が薄く堆積していた。有機質の蓋の痕跡などは検出できていない。

土師器皿Cは、出土状況からa～dの4群に分かれる。a群は6枚が重なり、横倒しの状態で出土した。b群はa群の下から、口縁部を上に向けた状態で2枚重なって出土した。c群は土師器甕の口縁部の下から、口縁部を下に向けた状態で3枚重なって出土した。このうち上から2枚目と3枚目との間に黄灰色粘土をはさんで



図258 SK10050検出状況（南西から）



図259 土坑切り取り作業の様子

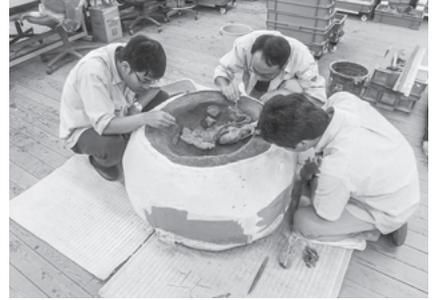


図260 屋内調査の様子

いる。d群はc群の下から、やや北西方向にずれた状態で、口縁部を下に向けた状態で2枚重なって出土した。c群と一連の可能性もある。

須恵器杯B片は外底面を上にした状態で出土した。口縁部片などはみられず、破片のまま土坑内に入れられたものとみられる。

出土土器（図257） 土師器皿C 5点、甕口縁部、須恵器杯Bを図示した。土師器は遺存状態が非常に悪く、調整の観察が可能な個体は少ない。皿Cは口径10～11cmの間にまとまり、器高も2cm前後におさまる。いずれも口縁部を横ナデし、底部外面にナデ調整を施す。2は内面に灯芯の痕跡がある。1～3は順にa群の上から3・4・6枚目の個体、4はb群の下、5はd群の下の個体である。土師器甕（6）は、風化が著しく全形の復元は困難である。口縁端部外面に面をもち、上方に肥厚させる。口径19～20cmに復元できる。土師器皿Cと土師器甕はいずれも胎土に赤褐色粒子と白色微砂を含み、黄褐色の色調を呈する点が共通しており、製作地は同一であったと推測される。須恵器杯B（7）は底部から口縁部にかけての屈曲が強く、口縁部が直立する形態を呈するとみられる。底部外面はヘラ切り後、中央に不整方向のナデ調整、外縁にロクロナデ調整を施す。

4 若干の検討

埋納順序の復元 土坑を掘削後、底面より約10cm埋め、d群、c群の順で5枚の皿を下に向けた状態でおさめる。次に、土師器甕を埋納する。元々横倒し状態でおさめたのか、口縁部を上方に向けた状態でおさめていたかは判断できない。皿a群とb群は、まずb群の皿2枚を重ねて口縁部を上向きにして置き、その上にa群の皿6枚が横倒しの状態で重なっている。当初からこの位置におさめられたかどうかは不明である。a群の口縁部が向

く方向と土師器甕の方向が揃うことから、a群の皿が当初は土師器甕内におさめられており、土坑を埋め戻す際に土師器甕が横倒しになり、口縁部から滑り出た可能性が考えられる。皿Cはa・b群とc・d群で埋納時の意味合いが異なっていた可能性も考えられる。

SK10050の性格 以上の埋納状況のうち、注目すべきは土師器皿Cのa群が土師器甕の内部におさめられていた可能性がうかがわれる点である。森川実¹⁾によれば、平城京とその周辺で出土した古代の埋納物の中には、土師器甕などに土師器食器をおさめる・または前者で後者を覆うなどした事例があるといい、これら埋納物は地鎮具としての性格を有し、さらに甕は祭儀の折に粥などの調理具として用いられたのち格納容器に転用されたもの、食器はその粥を取り分け供える祭器として使用されたのち埋納されたものの可能性が考えられるという。検出地点が坪の中央付近など特定の意味を類推しうる位置にないなどの問題もあるが、以上をふまえれば、SK10050は地鎮祭祀関連遺構と解するのが妥当であろう。

5 まとめ

現場での取り上げが困難な脆弱遺物を内包する土坑などに遭遇した場合、遺構ごと切り取って搬送し、屋内において作業や調査をおこなう方法を一つの選択肢として提示すること、それが本報告の第一の目的である。今回はこの方法を採用したことにより、土器の埋納状況などを詳細に観察・調査しえた結果、SK10050の性格をほぼ特定することができた。今後の調査手法の進展に寄与することを願いつつ、参考に供する次第である。

（山本祥隆・小田裕樹）

註

- 1) 森川実「平城京の地鎮とその執行者」『文化財論叢 IV』奈文研、2012。